

Ⅲ 本人の意思が確認できなくなった場合に備える(P12-13)

1 家族等(代弁者)と、本人の意向を共有しましょう。

- ・本人の意向を代弁者となる方と共有していることが重要です。もし可能なら、人生会議手帳2は、家族等と一緒に本人の想いを確認しながら、作成していくとよいでしょう。
- ・代弁者の役割は、家族の立場からの意見を述べるのではなく、本人の意思を代弁することです。家族等と一緒に手帳を記載する場合には、家族等にも説明しておきましょう。
- ・本人の意思が確認できないときには、家族等の意見を聞いてしまう傾向にあります。あくまでも、「本人の推定意思」を確認しましょう。

2 本人に「意思の柔軟性」について尋ねておきましょう。

- ・臨床の状況は複雑です。想定外の出来事により、代弁者が意思決定をしなければならない場合もあり、代弁者はとても苦しみ、悩みます。本人の「意思の柔軟性」を尋ねておくと思決定に有用であり、本人の意思を推定する者の苦悩が軽減するといわれています。

※意思の柔軟性:どの程度、自身の考えを尊重してもらいたいかの程度

- ・上記の理由を本人に説明したうえで、どの程度、自分の意見を重視してほしいのかを事前に本人に確認しておきましょう。そして、代弁者となる家族等とも共有しておきましょう。

例えば…以下のような例文を参考に尋ねてみましょう。

- 「病状の変化のために、予想していないことが起きたとします。医師が△△さん(家族等)と話し合ったうえで、〇〇さん(本人)の考えと違う治療がよりよいのではないかと考えた場合、どう判断するのが よいでしょうか？」
- 本人が在宅療養を望んでいる場合「もし△△さん(家族等)が〇〇さん(本人)のケアをすることがとても負担になったり、家で療養することが困難になったりした場合、どのようにしたらよいでしょうか？」

3 本人の意向を遠方の家族とも共有しておく必要性を本人・家族に伝えておきましょう

- ・遠方に住む家族は、本人の変化を身近に感じることや本人と対話する機会も少ない状況にあります。「いつまでも、元気なころの〇〇さん(本人)であってほしい」という願いがあるがゆえに、病状変化に気持ちがついていかないことは当然のことでしょう。それがゆえに、上記のような場面では、家族間の意見が違ふことで意思決定ができないことも少なくありません。
- ・事前に本人の意向を共有しておく必要性を伝え、近くにいる家族だけでなく、遠方に住む家族と、本人の意向の共有をしておくようにすすめましょう。必要に応じて、医療・ケアチームが話し合いの場を設定するのもよいでしょう。

【救急活動(搬送)】の意味と備え:在宅療養や看取りの希望を支えるために

- ・救急活動は、原則、救命が目的です。延命処置を希望していない方が救急搬送されたとしても、救命処置を行うことが活動の使命です。
- ・本人や家族等が思わず救急車を呼んでしまうのは、急変による不安や恐怖などが理由となります。希望しない救命処置を受けないための備えとして、急変時に適切な相談相手(訪問看護師等)がいることが一助となるでしょう。
- ・延命処置を希望しない場合や、在宅での看取りを希望する場合には、本人や家族等に救急活動の意味とその備えについて説明を行い、早めに訪問診療医師や訪問看護の導入を促すことが重要となります。本人の希望を支えるための地域連携による医療・ケアチームをつくるのがカギとなるでしょう。